

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-20

横田は話しの途中で、背伸びをして小さなため息をついた。

真紀は男がひと仕事成し遂げた後の充足感と旅の解放感とが縋い交ぜとなって現れた言動の深層心理を汲み取ろうとした。

「淡谷のり子さんは、それだけ魅力があったのですね」と真紀は言って微笑んだ。

「うん、伝聞だけれど、肉厚な唇に色白の肌と肉感的な体だったようだ。当時のモノクロ写真を見ても首肯けるね」と横田は相槌を打ってから、真紀が話に乗ってきてくれたことに安堵して、話を続けた。

「画家はプロやアルバイトのヌードモデルへ時給計算で報酬を支払うが、モデルが妻や恋人や愛人なら無償の行為となるし、緊張感も違ってくる。どちらがいいかは決めかねるけれど、ゴヤ、ルノワール、モネ、マチス、ピカソなどの作品は後者なんだ。だからと言って、モデルになってくれた相手との信頼関係がなかったら、名画は生れなかったと断言できる」と横田は熱っぽく語りかけた。

「それでは、淡谷のり子さんの裸婦像は駄作ですか」と真紀は断定気味に尋ねた。

「……うん。画家がモデルと対峙する時の中途半端な距離感だろうね」と横田は歯切れの悪い返事をしてから、真紀への感謝のつもりで例え話をしたことが、よくない方へ向かっていることに気づいた。多分、現状に自己陶醉していたせいだ。

「どうかしました？」と真紀は尋ねた。彼女には男の心情が読めなかった。

「回りくどい話をしてしまったね。とにかく貴女がいなかったら、今度の処女作は考えられなかった根拠を伝えたかっただけだ」

「処女作……」と真紀は復誦した。

「僕には描けないと諦めていた裸婦像が、いろんなことがうまくフィットして描けたことだよ」と横田は気持ちを込めて言った。

「私は恋人？それとも愛人？」と真紀は無性に男を困らせたくなくて、走行中の安全を確認しながら相手の顔を覗き見して尋ねた。

「根性曲りの女だ」と男は嫌味を言ってから首を捻り伸ばして、真紀の形のいい唇の端に盗むようなキスをした。

「まあ、呆れた！運転の邪魔をしないでください」と真紀は口元を緩めて牽制した。

「そろそろ朝食にしないか」と横田はナビ画面の時計表示を見ながら言った。

嵐山PA下り線に駐車して外に出ると、朝七時の晩秋の風は冷たく二人を包んだ。